

保育おおさか

No. 495

平成 28 年 11 月 1 日

発行人 永野 治男 編集人 齊藤 和正

大阪府中央区中寺 1 丁目 1-54
TEL.06-6762-9001 FAX.06-6768-2426
http://www.ans.co.jp/u/osakahtoiku/



平成25年度
29年度の
間に保育の
受け皿を40
万人から50
万人に拡大、
待機児童
解消を図る。
各自治体の
取り組みにより
27

「待機児童解消加速化プラン」では
厚生労働省雇用均等・児童家庭局
保育課の楠目聖氏から、少子化が進
む中でも女性の就業率が増加し、保
育園利用のニーズが高まっているこ
とを解説。その対策として「待機児童
解消加速化プラン」と「保育人材確
保」を主に説明されました。

「待機児童解消加速化プラン」では
厚生労働省雇用均等・児童家庭局
保育課の楠目聖氏から、少子化が進
む中でも女性の就業率が増加し、保
育園利用のニーズが高まっているこ
とを解説。その対策として「待機児童
解消加速化プラン」と「保育人材確
保」を主に説明されました。

「待機児童解消加速化プラン」では
厚生労働省雇用均等・児童家庭局
保育課の楠目聖氏から、少子化が進
む中でも女性の就業率が増加し、保
育園利用のニーズが高まっているこ
とを解説。その対策として「待機児童
解消加速化プラン」と「保育人材確
保」を主に説明されました。

保育園利用のニーズの高まりにこたえて

処遇の改善による

保育士人材の質・量の拡充を

10月12日～14日に第60回全国保育
研究大会が開催され、13000人を
超える保育関係者が参加。1日目に
行政説明・基調講演、2日目に関係11
分科会、最終3日目には記念講演が行
われました。(関連記事2面)

行政説明・基調講演

年度までに、約31.4万人分の受け皿
を確保、1、2歳児の保育園利用率が
35.1%から41.1%に増加している
ことを説明。さらに29年度までに約
48.3万人の拡大を見込んでいると
話されました。

受け皿拡大に伴う「保育人材確保」
についても約7万人から約9万人へ
上方修正し、その一つとして保育士
と全産業における女性の賃金に月額
4.3万円の差があり、まずはこの解
消を目指すこと。さらに修学資金貸
付の拡充などによる「保育士資格の
新規取得者の確保」や、「保育士の就
業継続支援。保育士配置特例による
子育て支援員等の「多様な人材の活
用」と「離職者の再就職支援」を今ま
での保育人材確保策に加えて実施す
ることなどを説明。



記念講演の様子

最後に「人材確保対策は各市町村
が手をあげる必要があり、現場の声
を訴えることが大切です」と締めく
くられました。

記念講演

と、質の確保をしながら量を拡充す
ることを要望していくと話されて
大会の1日目を締めくくられました。
(編集委員 T・T)

大会3日目

には、「子ども
であるという
自然」をテー
マに、写真家
の小西貴士氏
による記念講
演が行われま
した。

まるで写真展のようなスライド
ショーに心地よい音楽が、小西氏の
心情を表現した詩に乗せて講演が進
められます。ヒメジョオン満開の季
節に花を鼻の中に入れて「鼻に花」と
いう子、弁当を食べるとき、「よく手
を洗って」と言われたにもかかわらず、
そのままの手で食べようとした
子に注意しようとした先生に「から
揚げ食べる？」と突拍子もないこと
をいう子。



天皇陛下がご
意向を示された
「生前退位」につ
いて、世間でい
ろいろ騒がれて
いる。
ご高齢の両陛下
のお気持ちを察するとさまざ
まな思いが頭を巡る。有識者会議
の皆様方には、幅広く意見を聴取
し慎重に検討していただきたい。
125代、2千年以上続いて
きた日本の皇室は世界に比類の
ない歴史と伝統をもっている。
わが皇室はその淵源が神話に
まで遡る最古の王室であり、し
かもその皇位が今日まで断絶す
ることなく継承されてきた。そ
の歴史的事実は世界の奇跡であ
り、日本の誇りだと思ふ。

第4分科会

コミュニティの再編を図り 孤立化を防ぐ

第4分科会「地域の子育て家庭への支援の充実に向けて」では、福島県南相馬市立原町からさくらい保育園主任保育士の今野満子氏と、あずま保育園保育士・原町子育て支援センター主任の佐藤真規氏が発表されました。

この施設の子育て支援センターでは、地域の子育て家庭に、遊べる場所や保護者同士の交流の場の提供のほか、育児相談などを行っており、この活動を通して、震災後も地域で子育ての喜びや楽しさを実感しながら生活できるように、支援をしています。

また、福島第一原子力発電所から30km圏内にあり、平成24年の子育て支援センター再開当初は、放射線量に対する不安の声が多く、その不安を軽減することが重要でした。

そこで、園内各所の放射線量を測定し保護者に提示。あわせて、毎朝遊具の水拭きや園庭除草などを行いました。佐藤氏は「保育者が共

に悩み、不安を整理し、利用者のために努力をしている姿を見ることが、不安の軽減につながる」と話されました。

また、利用者からは情報の少なさと情報交換しあえる人の少なさについても不安の声が多く、地域の子育て家庭への支援を充実させるためには、コミュニティの場となりうる子育て支援センターを利用してもらうことが大切。「震災後、失いつつあった地域コミュニティを保育園、子育て支援センターが担うことで、子育ての孤立化を防ぎたい」と佐藤氏は力を込めました。

最後に関西大学教育学部教授橋本真紀氏が「保育者も被災をしている中で、子育ての場や生活を取り戻し、コミュニティの再編をするという貴重な経験を共に学べる報告であった」と結ばれました。(事務局)

第10分科会

社会福祉人としての公益性を高め、社会貢献につなげる

第10分科会では「社会福祉法人改革への対応と、子

ども・子育て支援新制度の動向をふまえたこれからの「保育」がテーマでした。最初にコーディネーターの関川氏(大阪府立大学教授)が講演。その後、熊井氏(社会福祉法人千里山山手学園理事長)と野原氏(社会福祉法人興望館常務理事)を迎えて社会福祉法人の公益性についてパネルディスカッションが行われました。以下はその主旨です。

関川氏

人口減少の傾向がこれからも継続し、待機児童問題はあと数年の問題。そんな中で、いかにして全ての子どもが健やかな育ちを保てるかが、近い将来の課題です。保育園等を利用していない子どもたちは250万人以上存在しています。その家庭が困った時に、支援が受けられ、子どもの育ちを保つ必要があります。

社会福祉法改正のねらいは社会福祉法人のガバナンスをしっかりとしたものにし、公益性を高め、制度以外への支援・地域の子どもの最善の利益を求めるもの。

行政から任せられている以外にも積極的に取り組む、子

どもの分野で国民の負託に
応えていくことが大切です。

熊井氏



熊井氏

大阪府社協の取り組みであるスマイルサポーターとオール大阪の取り組みを紹介。

保育園には年間5万4800件の子育て以外の相談

発達保育実践 政策学センター

公開シンポジウム開催

9月17日に東京大学本郷キャンパスで「今、日本の保育の真実を探る」九万人の保育者と千七百万力の自治体関係者の声を聴く」と題した、公開シンポジウムが開催されました。

主催の発達保育実践政策学センターは、昨年7月に設立された乳幼児期からの



が寄せられており、スマイルサポーターが保育園だけでは解決できない問題を、施設種別を超えた現場レベルでの連携をとり、支援を行っています。

野原氏

新制度に迅速に対応し、地域の課題から生まれてくる地域福祉に保育園も積極的に入っていく必要がある

ます。保育園が包括的な施設となり、多くの地域の方が利用できる取り組みを実施し、社会福祉法人間の連携を模索していくことが大切です。地域に生活の場になり、地域に住む人たちの結び目を目指しています。

最後に関川氏から「今ある保育園施設の機能を活かし、発展させ、できることを考えていくことが、公益性を高めていく上で大切ですよ」と分科会を締めくくられました。(編集委員T・T)

保育・教育を研究する機関です。東京大学教授秋田喜代美氏を中心に、昨年度に実施した大規模調査に基づく分析結果の報告、指

定討論が行われました。保育者の「労働環境」は、職務満足感や職務遂行能力、子どもたちとのポジティブな関わりに影響。園の労働環境の質が、保育者の負担感、体調、満足感に反映されていると想定。

離職防止・保育者の体調やメンタルヘルスの維持・

向上には、管理職が職員同士の関係性のマネジメントに意識的に取り組む必要があるとまとめられました。

続いて自治体調査の結果における保育・子育て支援行政の実態と課題について解説。東京都文京区における取り組みを区長成澤廣修氏が発表。本年4月、全国初となる区設国立大学法人運営による「文京区立お茶の水女子大学こども園」を開

設。保幼小中連携プロジェクト等、「待機児童解消」と「保育の質」の向上への取り組みについて述べられました。(編集委員M・K)

豊中ひだまり保育園

中ひだまり保育園は、阪急豊中駅から徒歩5分、ハートパレットの2階に平成28年9月1日に開園された定員39人の0・1・2歳児の施設です。

建物内には中部保健センター・豊中市社会福祉協議会など、子育て中の方や地域の方が集う施設があり、母子手帳を受け取りに来られた新米パパ・ママや各種イベントに参加したママ友達が見学に来られ、保活に向けて積極的な質問や育児相談をされたりと、需要の多さを改めて実感しております。

保育室は乳児が心身ともに

保育園は大きな家族

きょうだいのように
一緒に成長しあいたい

保育所

とよなか

豊中ひだまり保育園

豊中市



できたてのきれいな木の看板

に安心して生活できるように木の温もりを感じられる日本古来の色合いに改装しました。玄関から保育室までのアプローチはなだらかな坂になっており、イモ虫になり転がったり、裸足で感触を楽しんだりとさまざまな遊びを展開しています。

保育は乳児担当制を取り入れ、食事・睡眠・排泄等の生活面の安定を図り、「じぶんになりたい」という思いを十分に発揮できるように、保育者間の連携を密に、個々の育ちに合わせた援助を心掛けています。

また、保育園を大きな家族として捉え、0・1・2歳児と一緒に成長しあえる環境を大切に、きょうだいのように過ごしているそうです。食事は国産の旬の食材を活かしたオリジナルメニューを栄養士が考え、



木の温もり感じる保育室

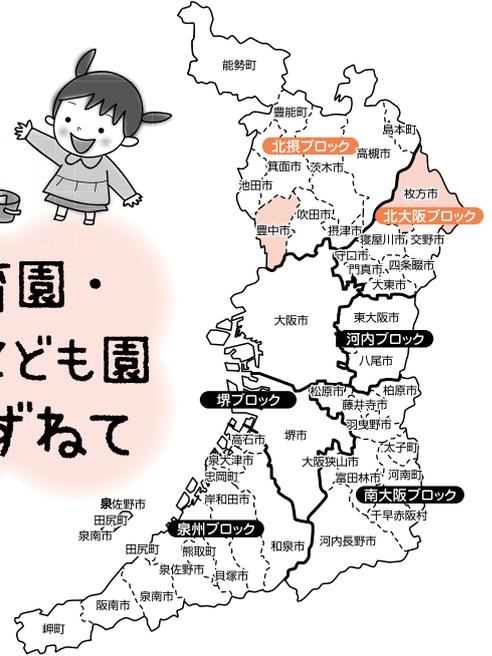
素材本来の味や食感を大切に調理しています。「保護者の方には「保育参加」と称し、パパ・ママ先生として半日保育者体験をしてもらい、ひだまり保育園みんなの保護者として支えていただいています」と、小島美恵園長は語られました。

(編集委員 Y・T)



保育園・認定こども園をたずねて

549



楽しい雰囲気漂う外観

講師やボランティアの方から、自然について学びます。トンボなどの虫取りの方法、池の中のザリガニやオタマジャクシの観察。葉っぱを使つての遊び。子どもたちの目は興味津々に輝きます。

「環境出前学習」への積極的な取り組み

友達と一緒にさまざまなことを学ぶ

保育所

とくふう

徳風保育園

枚方市

枚方市東部にある徳風保育園は定員150人

現在、3〜5歳児の157人の子どもたちが生活しています。

保育で大切にしているのは、健康な身体づくりと、子どもたちが自然に出会うこと。徒歩20分ほどにある府営山田池公園は散歩コースに最適な場所で「身体をしっかりと動かして自然の中で刺激を受けてほしい」と頻繁に出向いています。

枚方市実施の「環境出前学習」(体験型環境プログラム)に積極的に参加し、公園での職員や自然に詳しい

園庭で夢中でつくっているのは泥団子。まんまる、ピカピカ光輝く泥団子がたくさんできていました。

保育方針に「心と体の自立を促す保育」―さまざまな経験を通し、健康な心と社会性を身につけ自ら考え、行動できる子どもを育てる―を掲げています。藤原園長は「自分で考える力と情操面を大切にしています。友達との意見のぶつかり合いからも、相手への思いやりや我慢すること

を学び、友達の存在の大きさを感じ、友達を大切にできる子に育ってほしいです。」とおっしゃいました。帰りに園の玄関で飼育されているたくさんのかぶトムシに出合いました。また来年たくさんのかぶトムシが生まれることでしょう。登降園時、親子で観ることで会話が弾んでいるのと、子どもたちにはしっかりと命の尊さが伝わっているようです。(編集委員 H・S)



みんなで仲良く泥団子づくり

遊びの中から人間として 社会生活に必要なものを 身につける

南 海高野線堺東駅、JR
阪和線三国ヶ丘駅
から徒歩15分にある堺東保
育園は、昭和54年に定員90
人で開園。地域の待機児童
解消のため平成12年、17年
に定員増、定員150人に。
平成27年度から幼保連携型
認定こども園へ移行しまし
た。陽あたりのよい南向き
で明るいくリーム色の2階
建園舎が印象的です。

幼保連携型認定こども園
さかいひがし
堺東保育園

堺市



陽のさす園舎

「親しまれる保育園」を
モットーに人間関係を大切
に、信頼しあい助け合いな
がら、子育てに取り組んで
います。園長の「遊びの中
から人間として社会生活に
必要なものを身につける」
という方針で、園児たちは
元気一杯、のびのびと遊び

を楽しんでいました。園庭
には子どもたちの掘った穴
があちこちにあり、雨でで
きた水溜りでみんな泥んこ
遊びを楽しんでいました。
特徴的な取り組みとして、
10年ほど前から「すずめ踊
り」に取り組んでいます。
「すずめ踊り」は仙台青葉城
築城の際に、堺の石工たち
が仙台へ出向き踊ったのが
広まり盛んになったといわ
れています。伝統ある「す
ずめ踊り」を仙台から堺へ、
そんな思いから取り組むよ
うになりました。初めの頃
は見よう見まねでしたが、
職員が現地に赴き本場の踊
りを見学したり、堺すずめ
踊り連盟の方に本格的に指
導していただき、保育士のお
囃子による迫力ある踊り
になりました。運動会で毎
年地域の方々披露されて
います。「素直で謙虚な明る

い子」最後までやり遂げる
粘り強い子」「生活ルールの
守れる子」を望ましい子ど
も像として日々頑張ってい
きたいという決意をうか
がって園を出しました。
(編集委員 T・S)



すずめ踊りを華麗に披露



保育園・
認定こども園
をたずねて

550



洋風のおしゃれな外観

心優しい思いやりの
ある子に育てたい
働く保護者を力強くサポート

和泉市

保育所

クリアール保育園

(編集委員 K・A)



シャボン玉飛んでいけ!



シリーズ●より良い保育士養成のために

「より良い保育士養成のために」を終えて

保育おおさか編集委員による意見交換会

保育おおさかでは、平成27年2月発行第474号から21回にわたり、「より良い保育士養成のために」と題して、保育士養成校の先生方に連載記事を執筆いただきました。

改めて連載を振り返ると、保育士としてのマンパワーを園につなげるための養成校のさまざまな想いや工夫が伝わります。「今どき」といわれる学生の特性と養成の苦労、実習での施設とのかかわり方や記録・研究報告など、多角的な視点から執筆され、実態を伝えていただきました。

9月16日に開催した保育おおさか編集会議（齋藤委



意見交換時の様子

員長では、本連載を振り返りながら「保育園・認定こども園として、保育士にとって魅力ある職場づくりとはをテーマに、編集委員14人で意見交換を行いました。ここでは、意見の一部を紹介します。

人が人を育てる

連載から伝わる養成校の「施設に良い人材を輩出したい」という想いや工夫を受け、人材育成において各委員から、さまざまな考えや取り組みが報告されました。

● 育成には職場の人間関係が重視される。先輩職員の一方向的指導は、人間関係に距離感を生みやすい。

● 肯定し、受容することから育成ははじまる。「できていない」ではなく「できる」を探し、ほめて育てる。

● 職場内で「職員の輪の雰囲気づくり。この輪を乱さないために、職員同士が協力しあい、理解しあうようになる。

● 保育士を育てるというより「人間力」を育てる。人として尊重し、愛や敬意のある養成が人そのものを育む。

委員の意見として共通しているのは、「人が人を育てる」と。新規採用にせよ実

習にせよ、人だけを見て評価するのではなく、園の先輩職員等のかかわり方、記録の取り方など、職場全体として人材をいかに育成していくかが重要だという意見が多く寄せられました。

時代の変化を受け入れる

連載によれば、「最近の若者」という概念は、養成校全体の共通認識であるようです。

しかし、その世代間格差を園ではどのように考えられているのでしょうか。

● 若いには若いなりの感性や価値観があり、ネガティブに思っていない。若さをプラスと捉え、まずは信頼する。

● 「若い」ということは、子どもに一番近い存在でもある。若い保育士に「あなたならどうする？」と尋ねると、思わぬヒントをくれることもある。

● 年齢にかかわらず保育士からの提案は基本採用し、チャレンジさせる。その

代わり諦めないこと、やりきるこの大切さを教えている。

● 奨学金を受ける学生が増え、返済が仕事の目的となると将来ビジョンが立てられない。「なぜ保育士になったのか」を考え働く楽しさを共有したいと思っている。

養成校の連載の中に、「生徒に子どもたちとの距離を縮めることを教えている講師でありながら、生徒との間に世代間格差を感じてはいけない」という意見があります。園でも「若さ」を活かし、マンパワーとしてさまざまな養成を考えられています。

園外から学ぶ

少数ではありませんが、委員から次のような意見も出されました。

● 他園への見学会を実施している。他の職場を見ることが大切だが、他園の保育士のマンパワーにふれることが重要。

● 異業種への見学を取り入れ、保育・福祉にとどまらない広い視野をもてるよう機会を提供している。

園外に赴くことで、さまざまな刺激を受ける機会とされています。その他、独自の研修課程を組み、履修することで賃金額に還元するなど、OJTやOFFJTを取り入れ、研修を計画化することもまた、育成の評価指標として有効であるとの意見もあがりました。

これからに向けて

予定時間を大幅に超えて行われた今回の企画では、熱を帯びた意見が交わされました。

編集委員の先生方からは「改めて連載を読み返すと、保育士養成校の生の声が切実に届いた。養成校と園の双方が理解しあい、これからも高めあっていきたい」と力強い言葉をいただきました。（事務局）





河内

児童虐待の現状と
子どもの権利擁護

9月9日、くれたけ法律事務所の池田清貴弁護士をお迎えし「児童虐待の現状と子どもの権利擁護」をテーマに研修会を開催。34人が出席し質疑応答等も活

発に行われました。

平成27年度厚生労働省発表による児童相談所での児童虐待相談対応件数は10万3260件で平成2年から比べると25年間で1000倍に増えているそうです。内訳として心理的虐待が47%、身体的虐待が28%、ネグレクトが24%、性的虐待が1%という結果でした。



熱心に勉強中

その背景には、核家族化や離婚率が上がっているということがあるようです。

- ①子ども時代に大人から愛情を受けていなかったこと
- ②生活にストレスが積み重

なり危機的状況にあること
③社会的に孤立化し援助者がいないかったこと④親にとつて意に沿わない子であることがあげられました。

また保育園がやるべきことは、虐待の兆候を見逃さず、つなぐこと。これは保護者への信頼と疑いのはざまで大変難しいことですが、対応しながら証拠の記録保全に努めなければならぬ。子どもからの聞き取りでは「はい」「いいえ」で答える

堺

乳児保育の
専門性を高める

質問ではなく子どもが自分の言葉で答える質問（オープンクエスチョン）にするよう配慮が必要であることも教えていただきました。子どもの命に関わることなのでみなさん真剣に聴講していました。

(編集委員T・Y)

9月29日、NPO法人さ

かい民間教育保育施設連盟主催で保育士向け研修を行いました。第2回は「乳児期の生活と環境」をテーマに、久々知おもと保育園園長の谷重田美子氏をお招きし講演していただきました。

「育児の時間は、同時に教育をする時間でもある」育児は・排せつ・食事・睡眠・衛生という、生きていくた



研修のようす

めに最も大切といえる基本的な行為を、子ども自身が自分の体の状態を與球として感じられるようにする方法を伝えていく過程です。育児は子どもと目と目が合いい、合意してくれたときからはじまり、最後までがコミュニケーションです。

また、育児の時間はかまわれるのでもなく、可愛がるのでもなく、無駄におだてるのでもなく、丁寧にするのでもない。保育者が子どもの言っていることを聞き、答えることです。

「子どもの目をよく見て要求に応えれば、子どもはたくさんコミュニケーションをするようになる。できるようになるまで手伝った方がいいのです。子どもを自由にすることは、子どもに注目しなければできません。真面目な保育者は『ああして、こうして』と子どもを自由にしていない」とおっしゃっていました。

受講者からは「一人ひとりの人格を大切に保育していきたい」「乳児期は人生の基礎であると改めて感じました」などの感想が寄せられました。(編集委員R・T)

さんぽ



平成28年度から大阪府社協福祉人材支援センターと保育部会が連携して行う「高校生のための保育の職業体験事業」として初めての取り組みがはじまった。大阪府下の全体の申込高校数：28校 申込生徒数：147人(男性13人、女性134人) 体験受入登録施設数：203施設 実受入施設数：95施設という結果となった。

当園は8月1日～5日男子1人を受け入れた。「小さい子どもが好きで保育の仕事に興味があったので希望した」とこの感想を聞いてみると、「お

5日間の夢体験

とであった。体験クラスは1歳児～5歳児で毎日違うクラスに入るので戸惑いがあるのではないかと心配していたが、各クラスの担任に指導を受けながらも子どもと楽しく過ごしていた。養成校の実習生とは違う立場なので、なるべく子どもたちとふれあえるように配慮した。

5日間の体験が終わり、感想を聞いてみると、「お

母さんの大変さがとても分かった。5日間とても楽しかった。1、2歳児はあまりしゃべることができないので、食事の好き嫌いがあの子は食べさせるのが大変だった。

泉州
ブロック

ブロックで叩きに来る子どもがいたが、叩くことはいけないと言いつつ聞かせた。しかしやめずに困った。幼児さんは、言葉をすぐに返してくれるのでコミュニケーション

が取れて楽しかった。体力的には大変だった。いうことを聞かない子どもへは、優しく言葉をかけた。最後に「この道に進もうと思っている」と言っていた。

保育の職業体験を通して、自分の進む道を見つけることができたことをうれしく思う。

これからも「夢体験」の手伝いができること、保育士を目指す人を育てること、そして園としての地域社会と関わることの必要性を示す、良い機会になったと思う。(池上わかばこども園J・H)